

# 日本語母語話者が習得すべき国際英語の発音基準

—大学英語教育の場から考える—

● 中 村 聡

## 1. はじめに

本稿の目的は、清水（2011）の提唱する、英語を母語としない日本語母語話者と英語を母語としない他言語の母語話者との英語での音声コミュニケーションを前提にした発音指導上のガイドライン試案を批判的検討し、大学英語教育段階で最低限どの程度の発音力を習得すべきかについて基準を示すことである。

英語が国際英語<sup>1</sup>としての役割を強めるにつれて、英語はもはや、それを母語とする人々のみの言語ではなく、非母語話者の間で通用語として使われることのほうが多いのだから、母語話者のような発音を目指す必要はなく、使う子音と母音の音素を削り、通じるための最小限の発音を習得すればよい、という考え方が広まり、Jenkins（2000）のように、非母語話者のための発音モデルを提唱する研究者も出てきている。清水のガイドライン案も Jenkins の提唱する *Lingua Franca Core*<sup>2</sup>を基に組み立てたものである。本稿では、清水案を基に、大学英語教員の視点から、より現場を反映したガイドライン案について論じていく。<sup>3</sup>

## 2. 清水（2011）の習得ガイドライン案

本稿では、日本人研究者の提唱する国際英語発音モデルの代表として清水（2011）を選び考察の対象とする。筆者の調べた限りにおいて、その他の関連論考は体系的と呼べるほどの発音基準を示していないからである。<sup>4</sup> 清水のガイドライン案は、日本語の特性を考慮し、日本語母語話者が英語非母語話者と意思疎通するための最低限の発音指導を、必ずしも音声学の知識を持たない指導者が行うことを前提としている。次にその概略を示す。

### 2.1. 子音

#### 2.1.1. 閉鎖音 /p/, /b/, /t/, /d/, /k/, /g/

日本語の/p/, /t/, /k/の気音はあっても弱いので、/b/, /d/, /g/に聞こえることを避けるため、強く気音を出す指導が必要。ラ行子音のように発音する北米英語の母音間の/d/は避ける。/b/, /d/, /g/は、それぞれバ行子音、ダ行子音、ガ行子音でよい。

#### 2.1.2. 破擦音 /tʃ/, /dʒ/

/tʃ/, /dʒ/とも日本語の「チ」「ジ」の出だしの子音でよい。

#### 2.1.3. 摩擦音 /f/, /v/, /θ/, /ð/, /s/, /z/, /ʃ/, /ʒ/, /h/

/f/を「フ」、/v/をバ行子音で代用せずに、きちんと発音できるようにする。/θ/を[s]の音で、/ð/を[z]で代用しても通じるので問題ない。英語の/s/と「シ」の子音との区別ができるようにする。/z/については、zip や zeal のような語では日本語の「ジ」を使わずに「ザ・ズ・ゼ・ゾ」と同じ子音を使うようにさせる。ともに「シ」「ジ」の子音でよい。/h/は「ハ・ヘ・ホ」の子音でよい。/ʃ/は「シャ・シュ・ショ」や「シ」、/ʒ/は「ジャ・ジュ・ジョ」や「ジ」の子音でよい。

#### 2.1.4. 鼻音 /m/, /n/, /ŋ/

/m/, /n/はそれぞれ、マ行子音、ナ行子音でよい。ただし、語末の/n/では「ン」を使わないように注意する。/ŋ/が難しい場合は、/g/を付けて/ŋg/としてしまっても、通じやすさの点で心配はない。

#### 2.1.5. 側音 /l/

日本語にない音であるが、身につける必要がある。「返礼」「本来」等の「ン」の後のラ行子音を、舌先を歯茎の裏につけたまま「ルー」と引きのぼして発音する。子音の前や語末に現れる/l/には「ウ」を使ってもよい。

#### 2.1.6. 接近音 /r/

/r/を日本語のラ行子音で代用せず、舌先を口中のどこにもつげずに発音させるようにする。/l/との違いを意識して、/l/と/r/を発音し分けられるようにする。/j/の音には「ヤ・ユ・ヨ」の子音を使えばよい。/i/, /i/の前の/j/の発音は日本人には難しいので、通じやすさの点ではできなくても差し支えない。

#### 2.1.7. 子音連続

straight, textのような語の下線部の子音連続では、できるだけ母音挿入を避けるよう指導する。

### 2.2. 母音

#### 2.2.1. 短母音 /ɪ/, /e/, /æ/, /ɒ/, /ʌ/, /ʊ/

/ɪ/は「イ」と「エ」の間くらい音を用い、/æ/には「エ」と「ア」の間くらい音を用いる。その他の/e/, /ɒ/, /ʌ/, /ʊ/については、「エ」、「オ」、「ア」、「ウ」でよい。

#### 2.2.2. 長母音 /ɜ:/, /i:/, /ɑ:/, /ɔ:/, /u:/

/ɜ:/には、唇を丸めない「ウー」、あるいは、歯を軽くかみ合わせたままで言う「アー」を使ってもよい。/i:/, /ɑ:/, /ɔ:/, /u:/はそれぞれ、「イー」、「アー」、「オー」、「ウー」でよい。

#### 2.2.3. 二重母音 /eɪ/, /oʊ/, /aɪ/, /ɔɪ/, /aʊ/

それぞれ、「エ」に軽く「イ」を添えた音、「オ」に軽く「ウ」を添えた音、「ア」に軽く「イ」を添えた音、「オ」に軽く「イ」を添えた音、「ア」に軽く「ウ」を添えた音で代えてよい。

#### 2.2.4. 綴り字に r を含む母音

NEARの母音は「イ」に軽く「ア」を、SQUAREの母音は「エ」に軽く「ア」を添え、STARTの母音は「アー」、NORTHの母音は「オー」、FORCEの母音は「オー」、CUREの母音は「ウ」に軽く「ア」を添える。

#### 2.2.5. 弱母音

できなくとも構わないが、たいていの場合には弱い「ア」を使うことができる。綴り字がeのときは弱い「エ」、oのときは弱い「オ」、iのときは弱い「イ」のように、綴り字に即した母音を弱めに発音すればよいことが多い。

### 2.3. 連続音声

#### 2.3.1. 語強勢

2音節以上の語では強勢がどの位置に来るのかに注意し、強勢のある音節の母音を強く長く発音する。

### 2.3.2. 弱形・短縮形

用いなくてもよいが、特に避ける必要はない。

### 2.3.3. イントネーション

適切な位置に区切りを入れる。これは意味内容から比較的容易にできるはずである。ひとつの節が一区切りになることが多いので、それも参考になる。次に、一つの区切り（音調群）の中でどの語に最も強い強勢（核強勢）を置くかを定める。新情報・旧情報の別、対比や強調の有無などから判断する。核強勢を受ける語の、語強勢の位置にある音節を強く長く発音し、下降調のイントネーションであればその音節で急激に下げ、上昇調であればその音節でピッチを上げ始める。ひとつの音調群は切れ目なく発音し、切れ目の部分では休止を入れて、区切りをはっきりとさせる。基本的な下降調と上昇調は日本語のものとある程度共通しているのだから、それを利用する。下降上昇調や平板調はできなくてもかまわない。

## 3. 清水（2011）案への疑問点

本節では、清水（2010）のガイドライン試案への疑問点2つを指摘し、第4節での筆者による発音基準の策定につなぐ。

### 3.1. 英語母語話者の発音を聞き取る能力が育つのか。

「発音できない音は聞き取ることはできない」という考えに立てば、<sup>5</sup> 清水自身が認めるように、母語話者を含まない、非母語話者同士のための会話を念頭に置いたガイドラインでは、母語話者との間での英語使用が必要になったり、職業上の理由で母語話者の英語に近い発音が必要になったりした場合に、ガイドラインに従って身に付けた発音が壁にならないだろうか。母語話者との会話に必要な聞き取り能力も育たないのではないか。日本人が英語を使う際に相手が非母語話者である場合が、母語話者である場合より多いとは限らない。

### 3.2. 教授対象と教授者はそれぞれどういう立場の人か

清水が想定している英語教育の場はどこで、教育する対象は誰なのか、はっきりとしない。学校教育の中での音声指導であるのなら、小学生か、中学生か、高校生か、それとも大学生か、あるいは社会人教育の場での指導なのか、民間の英会話教室での指導なのか、清水案は明らかにしていない。初めて英語に触れる小学生と6年間英語教育を受けてきた大学生とでは、発音習熟度に開きがあるはずで、同一のガイドラインが適用できるとは思えない。

## 4. 大学前期課程英語教育を念頭に置いた発音習得基準

前節で指摘した清水（2010）への疑問点を踏まえて、本節では、筆者が教員として、大学の英語授業で実際に観察した事実と、知人の大学英語教員とのやりとりから得た情報に基づき、大学教養課程を終えた段階の英語を専門として専攻しない学生が、英語音声学の知識を多く持たない英語教員の授業を受けた結果、最低限どの程度の発音力を身につけることが望ましいかを、清水のガイドライン案の項目に準じて論じる。清水案は、非英語母語話者同士のコミュニケーションを前提としたものだが、筆者の以下の考察では、日本語を母語とする人が、英語母語話者、英語非母語話者を問わず、英語でコミュニケーションをとることを前提とする。最低限と言う割には、大学生にさえ要求が厳しすぎるので緩和が必要なのでは、と考えられる項目も清水案にはある。これらには変更を加え、清水案に同意する項目については、その旨記す。

## 4.1. 子音

### 4.1.1. 閉鎖音 /p/, /b/, /t/, /d/, /k/, /g/

日本語の/p/, /t/, /k/の気音は弱いので、母語話者には/b/, /d/, /g/に聞こえることを避けるため、強く気音を出す指導は確かに必要。ただし、筆者の指導経験上、母語話者が識別できるほどの気音化を身につけられる学生は多くないので、できなくともよしとする。インド英語やマレーシア英語の話し手も、概してこれらの音を気音化しないことで知られている。ラ行子音のように発音する北米英語の母音間の/d/を避ける必要はない。/b/, /d/, /g/は、清水の言うように、それぞれバ行子音、ダ行子音、ガ行子音でよい。

### 4.1.2. 破擦音 /tʃ/, /dʒ/

清水案の通りでよい。

### 4.1.3. 摩擦音 /f/, /v/, /θ/, /ð/, /s/, /z/, /ʃ/, /ʒ/, /h/

/f/, /v/, /s/, /z/, /ʃ/, /ʒ/, /h/については清水案のままでかまわない。/θ/を[s]の音で、/ð/を[z]で代用するのであれば、弱めに発音すべきである。<sup>6</sup> /z/については、zip や zeal のような語では日本語の「ジ」を使わずに「ザ・ズ・ゼ・ゾ」と同じ子音を使うようにさせる、と清水は言うが、のことだが、筆者の教育経験上、/l/と並んで日本人大学生が苦手とするのが/z/である。無声音/s/ができない人は皆無なのに、同じ調音点の有声音/z/になると出来ない。学生は普段「ザ・ズ・ゼ・ゾ」の子音は「ジ」の子音、すなわち、/dʒ/で発音しているので、舌先を歯茎に付けない/z/を使ったことがない人が多い。したがって、/z/を最低限の習得項目とするのは厳しすぎる。<sup>7</sup> 発音できなくともやむなしとすべきである。

### 4.1.4. 鼻音 /m/, /n/, /ŋ/

清水案に同じ。

### 4.1.5. 側音 /l/

身に付けることを目指して努力を求める必要はあるが、できないからといって英語として通じないという程ではない。日本語以外の言語では音韻体系に/l/が組み込まれていることが多いので、それらの言語の母語話者はきわめて簡単に英語の/l/を調音できる。この音が日本語母語話者にとって、最も難しい音のひとつであることは、大学生への指導で痛感することである。筆者の経験では、発音に特化した少人数授業で長期間にわたる継続的発音指導があれば習得できる学生は多いのだが、全学共通科目としての通常の授業ではそこまではできない。したがって、習得できなかったとしても仕方がないと考えるべきである。

### 4.1.6. 接近音 /r/, /j/

基本的に清水案に同じだが、/r/の場合、舌先が口中のどこかに触れて、日本語のラ行子音に近くなっても問題なしとする。<sup>8</sup> /l/との違いを意識して、/l/と/r/を発音し分けられるようにする、とのことだが、現実的には、難しい。/j/の音については清水案に賛同。

### 4.1.7. 子音連続

清水案に同じ。

## 4.2. 母音

### 4.2.1. 短母音 /ɪ/, /e/, /æ/, /ɒ/, /ʌ/, /ʊ/

/ɪ/は「イ」と「エ」の中間くらいの音を用い、/æ/には「エ」と「ア」の中間くらいの音、と指導するのはよい。が、「イ」と「エ」の中間を安定して発音できる学生はそう多くない。/ɪ/を「イ」で代用しても通じやすさの点では問題ない。/æ/については、「エ」と「ア」の中間でな

くどちらかに寄ってしまっても問題ない。<sup>9</sup> /e/, /ɒ/, /ʊ/については、「エ」、「オ」、「ウ」でよいという清水案に賛成。ただし/ʌ/については、「短いアッ」とする。

#### 4.2.2. 長母音 /ɜ:/, /i:/, /ɑ:/, /ɔ:/, /u:/

/i:/, /ɑ:/, /ɔ:/に関しては、清水と同意見だが、/u:/は「唇をすぼめたウ」、/ɜ:/は、力を抜いてやや横に唇を引いた「アー」とする。

#### 4.2.3. 二重母音 /eɪ/, /oʊ/, /aɪ/, /ɔɪ/, /aʊ/

それぞれ、「エ」に軽く「イ」を添えた音、「オ」に軽く「ウ」を添えた音、「ア」に軽く「イ」を添えた音、「オ」に軽く「イ」を添えた音、「ア」に軽く「ウ」を添えた音で代えてよい、という清水案に、二重母音の第一要素のそれぞれ「エ」、「オ」、「ア」、「オ」、「ア」をやや長めに発音することを加える

#### 4.2.4. 綴り字にrを含む母音

清水案でかまわない。

#### 4.2.5. 弱母音

清水案と同じ。

### 4.3. 連続音声

#### 4.3.1. 語強勢

基本的に清水案と同じ。ただし、強勢のある音節の母音を「ゆっくり、高く、強く」発音する。<sup>10</sup>

#### 4.3.2. 弱形・短縮形

清水案と同じ。

#### 4.3.3. イントネーション

基本的な下降調と上昇調は日本語のものと同程度共通しているので、それを利用する。下降上昇調や平板調はできなくてもかまわない、とする部分は清水に同意する。しかし、音調群や核強勢に関わる説明は、(英語)音声学に精通している指導者でなければ無理であろう。大学の英語教員の多くは(英語)音声学を学んだ経験を持たない現状を踏まえ、音調群・核強勢に関しては最低習得条件から外さざるをえない。

## 5. おわりに

以上、清水(2010)の日本母語話者向けの国際英語発音習得ガイドライン案を、筆者が経験してきた大学英語教育の実情を反映したものへと発展させ、最低限の発音習得ラインについて筆者の考えるところを、主として自らの教育実践に基づき述べた。大学生たちは中学校・高等学校で十分な英語発音教育を受けずに大学に入ってきており、大学教育でも英語を専門に学ぶ学生を除いて、時間をかけた発音指導を受けることは稀である。手島(2010)が主張する中学校・高等学校での発音指導事項の整理とシラバスの構築に陥って、大学の英語教育においても、発音に関してどのようなことを指導すべきか、到達目標をどこに置くか、合理的な根拠に基づいて検討する必要があるだろう。

## 注

- 1 本名 (2003), 鳥飼 (2011), 津田 (2011) らと同様に, 英語を母語としない人々の英語を「国際英語」(International English) と呼ぶことにする。
- 2 Jenkins (2000) は共通語としての英語 (English as a Lingua Franca) の視点から, 母語話者の発音を基準とするのではなく, 英語を母語としない者同士が英語で話した場合に互いの英語を理解できるかどうかという分かりやすさを基準にして, 音声面での共通語としてのコア (Lingua Franca Core) を探っている。
- 3 筆者は大学・大学院で英語音声学を学んだ後, 大学の教員を約14年務めており, 英語発音指導に重点を置いた授業を行っている。その間に, 講義科目「英語音声学」を3年間担当し, この3年間は英語音声を扱う, 後期課程学生向け演習科目 (ゼミナール) を担当している。
- 4 英語は今や世界中で話される言語であるから, 他の第二言語として英語を話す人と同じように, 堂々と母語訛りで話せばよい。大切なのは話す内容であって, 発音に心を砕く必要ない, という考えに基づいて, 諸氏が習得すべき発音の基準を示している。たとえば末延 (2011) は, ①英語の13の母音をアイウエオの5つで代用する②二重母音を長母音で代替する③子音については[θ]を[s]や[t]に, [f]は[h]に置き換える。[r]と[l]などの区別を厳格に求めない④プロソディー単語単位で区切り, 念を押すように, はっきりとした発音を心がけることを提案している。鳥飼 (2006) は, 「これだけは守らないと英語とは聞こえなくて通じない」要素として, 子音連結と強勢リズムは身につけるように, と述べている。
- 5 松澤 (2004) や伴野 (2005) が論じている。筆者も同じ見解を持つ。
- 6 思い切って, /θ/を[t]で, /ð/を[d]で発音する, 広く知られたアジア英語の特徴を取り入れてもよいのではないだろうか。
- 7 大多数の大学生は, /z/と/dz/の区別が苦手で, cars と cards の差を識別できないことが多い。
- 8 アジア圏で広く話される英語変種の/r/は舌先を口蓋につけた[r]や[r̄]であることが多いからである。
- 9 近年の米国英語は「エ」寄りに, 英国英語は「ア」寄りになっている。
- 10 高低アクセントと言われる日本語に対して, 強弱アクセントと言われる英語においても, アクセントの要因として「高さ」が重要であることについては, 鈴木 (1992) を参照。

## 参考文献

- 伴野健一. 2005. 「教科書を活用して」『英語教育』第53巻第13号, 12-13.
- 本名信行. 2003. 『世界の英語を歩く』東京: 集英社.
- Jenkins, J. 2000. *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.
- 松澤喜好. 2004. 『英語耳—発音ができるとリスニングができる—』東京: アスキー.
- 清水あつ子. 2011. 「国際語としての英語と発音教育」『音声研究』第15巻第1号, 44-62.
- 末延岑生. 2010. 『ニホン英語は世界で通じる』東京: 平凡社.
- 鈴木 博. 1992. 「言語技術としてのプロソディー」『言語』第21巻第9号, 38-45.
- 手島 良. 2011. 「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題—」『音声研究』第15巻第1号, 31-43.
- 鳥飼玖美子. 2006. 『危うし! 小学校英語』東京: 文藝春秋.
- \_\_\_\_\_. 2011. 『国際共通語としての英語』東京: 講談社.
- 津田幸男. 2011. 『日本語防衛論』東京: 小学館.